

○浜崎 満治 氏（平成 19 年、娘（当時高校 1 年生）を交通事故で失う）

[要旨]

15 歳の Messenger

浜崎奈那、長女、宇佐高校の 1 年 2 組でした。平成 19 年 10 月、後ろから来た脇見運転のトラックはブレーキをかけることなく、自転車で高校から帰宅中の奈那をはねた。それから、2 日後、目を覚ますことなく、奈那は旅立ってしまいました。あれから始まったのはつらく信じられない別世界でした。私たちの何がいけなかったのか、私たちにどうしろと言うのか、なぜ逢えなくなってしまったのか。平凡な家族 4 人の生活がどんなに幸せだったか、いまさらながらに痛感する。大切なことはなぜ失わないと気がつかないのか。笑顔、思いやり、そしてこんな大切な命。

あの日、奈那がどれくらいの人を愛し、愛されていたかに気がついた。病院にたくさんの方々も駆けつけてくれました。とめられた自転車 400 台。通夜に 700 人、告別式が 900 人、斎場に入り切れませんでした。自分がとつてもちっぽけだな、と気がつきました。

加害者

皆さんも加害者にはなりたくないと思います。あなたがいい人なら、自分の行いで人の命を奪うことはとてもつらく苦しいことだと思います。あなたが悪い人なら、逃げたり、嘘をついても自分の身を守ろうとするかもしれません。

私たちの加害者は、事故現場の近くに住む 49 歳の男性でした。彼には妻も娘もいます。右側に見える自宅に目をとられ、まったく気がつかなかったとのことでした。左目が義眼の上、脇見運転だったのです。事故は突然に悲劇をもたらします。あなたはあなたのため、被害者になる人のため、お互いの愛する人のため、気を引き締めてハンドルを握る責務があるのです。私はこのような悲惨な事故が起きない社会を願っています。

あの日から…

あの日から、妻は家に一人でいることができなくなりました。次女はしばらく学校に行けなくなり、お風呂に一人で入ることができなくなりました。私は消えてなくなりたいと思いつけ、なぜ自分があるのか、自分の存在が許せない時期が続きました。いろいろなことがフラッシュバックして思い出されます。小さいころの思い出もあるのですが、病院、霊安室、お通夜、お葬式とつらい場面が浮かびます。その中でも一番つらかったのが火葬場です。私は喪主でしたので、前にある赤いボタンを押さなければならなかったのです。

すべてが悲しみにつながります。娘は友達が多かったので友達が訪ねてくれるとうれしいのですが、「もっと一緒にいさせてあげたかった」と思いつらくなります。食事に行っても、買い物に行っても、思い出すことばかりで家で過ごすことが多くなりました。また、事故現場は加害者の家の近くのようですが、そこにお花や供え物をするとなくなることが続きました。私たちの心

が傷つけられたことは言うまでもありません。

私は、当初はどこに何を求めていいのかまったくわかりませんでしたので、インターネットで同じ境遇の方の情報を集めました。後を追った方、心療内科の薬の世話になっている方、離婚した方、閉じこもっている方、不当な裁判で苦しんでいる方がいます。その中で、社会的な活動に足を進めていく方もいます。

言葉は毛布であり、言葉はナイフである

私は、生涯、無縁だと思っていた人たちに接することになりました。四十九日が過ぎたころに事故の状況を聞きに警察に行きました。警部補が出てきて、何か機嫌が悪かったんでしょうか、「何が聞きたいんですか!」と言われました。私たちは被害者なのに加害者みたいな言われ方だったと感じました。10年前です、被害者支援という概念もまだ広がっていない時期だったと思います。次に、検察庁に行ったのですが、検察官が故意と過失の説明の中で「あなたもうっかりするでしょう?」と言われました。弁護士には「加害者も運転免許を取り上げられて、社会的に罰を受けています」と言われましたが、奈那は命を奪われています。とても比較にならない言葉です。このように、法に関わる職種の方からの言葉は私たちには冷たいものがありました。

また、日々の生活の中でいろいろな方から言葉をかけられます。「早く立ち直ってほしい」という思いからでしょうが、それらがまた私たちを傷つける。「早く元気になってください」「もう落ち着かれましたか?」。「生きている娘さんを大事にしないと」。私は今でも長女も次女も変わりなく大切です。「私だったら気が狂うわ」、これはうちの妻が言われた言葉です。「いつまでも悲しんでいると成仏できませんよ」、悲しんでいる自分がだめな人間のように思えました。事故当時は何も考えられないし、何もできない衝撃の中にいますが、日がたつて判断力や注意力が戻ってくると、悲しみが絶望的にどんどん深くなっていきます。「早く元気に」「落ち着かれましたか」という言葉にはギャップを感じました。

しかし、あるとき、同じく子どもを亡くしたお母さんに「背負っているのは悲しみじゃなく、それだけ大きな愛なんだよ」という言葉をいただきました。私はその言葉に助けられました。背負っているものが愛ならば、一生、背負って生きていいのだと思いましたが、今の自分でもいいのだと思いましたが。言葉はナイフのように傷つけることも、毛布のように包んでくれることもあると感じました。

講演活動をはじめ

こんな人生、無意味だ、いなくなりたいと思いましたが、それでは奈那ががっかりするだけ。「親に先立つ子は親不孝者」、これはうちの両親に言われた言葉です。奈那は親不孝者なんかじゃない、それを証明するためには、私は自分の人生を意味あるものにしなければいけないと考えました。そして、お別れから6カ月たった月命日に奈那のホームページを開設しました。奈那の鼓動が終わるとき、「いつも一緒にいるよ」って言ったね。これからも一緒に歩くことが私の未来なんだという思いから、私は講演活動を続けています。

今回は46回目の講演になります。8年間の間、学校、少年院、刑務所にも行きました。私は奈

那の同級生が3年生になって卒業する前に、友達でいてくれた感謝の思いを込めて、校長先生にお願いして宇佐高校で講演させていただきました。宇佐高校では奈那のためにハナミズキの木を植え、木のオブジェに名前を書き、そして木はいつかは腐るからと石碑をつくってくださいました。奈那のために卒業式もしていただきました。

出会い・支援

インターネットで子どもを亡くした親たちから情報をもらった、そこからが始まりでした。その中で、交通被害者遺族の会へつながり、そして被害者支援センターにつながりました。被害者支援センターの方には検察庁にも一緒に行っていただき、大変多くのご支援をいただいたと思っています。

奈那は成人式まで生きていたことができませんでしたが、被害者支援センターの方々のご協力もあって、一般成人式の日横の小ホールで「もう一つの成人式」を開催していただき、市長さんにも来ていただきました。事故後、妻が「奈那にぴったり」と買ってあった振り袖が、多くの方々のご支援で晴れ着となることができました。

次女には母方の祖母がずっとついていてくれました。次女の友達や妻の友達も来てくれました。次女も宇佐高校に行きましたが、「知られたくない」という気持ちが強かったようで、石碑があってもあまり関与しなかったようですが、学校も配慮してくれていました。宇佐高校から多摩美術大学へ行き、今は好きな道を進んでいると思います。

奈那の事故後、妻は看護師の仕事をやめ、調理師免許をとり、陶芸やお花と自分らしくしています。私は大学院の博士課程に進み、博士の学位をいただきました。仕事も管理的な立場にいますが、これだけが私の人生の意味ではないと思っています。今日のような機会をいただけてお話ししたり、学校でお話ししたり、皆さんの交通安全に対する意識が高まり、愛する人を亡くした方の心が和むことに役立つことが私の人生の意味である、と思っています。そして、奈那は命のメッセージで、今も活躍中です。

「お子さんは何人ですか」と聞かれたとき、当時、「2人」というと、ちょっと後ろめたい感じがしていたのですが、今は迷うことなく「2人」と答えています。次女も同じく2人と答えているみたいです。

一緒に生きる

皆さんは、愛を背負っていますか。愛を背負うということは時に思い通りにならなくて苦しいものです。私の場合は逢えなくなってしまいました。私は悲しみを忘れることはありませんが、とどまっているわけでもありません。私がこの世を去るとき、あなたと出逢えたからこそ、私はここまで来れたのだと胸を張れるのです。つらいと思うことも、あなたを思い出せば取るに足らないこと、親不孝どころか、あなたは今も私の力です。そして、未来へ続く力なのです。いくら気をつけていても、被害者になることはあると思います。でも、加害者にならないように努力することはできます。交通事故を起こさず、遭わないよう、交通安全をよろしくお願ひしたいと思います。